



『浅野氏広島城
入城400年』

浅野氏広島城入城400年記念リーフレット

第6巻

文化・芸術の振興、 祭礼・芸能・娯楽



浅野家紋

広島藩の絵画・画人



「三福神之図」(『厳島絵馬鑑』より)

〔国文学研究資料館所蔵 三井文庫旧蔵資料〕

天保3年(1832年)に刊行された千歳園藤彦編『厳島絵馬鑑』は、わたなべたいかく まる も おんよう しらいなんよう わたなべこうこく 渡辺対岳、丸茂文陽、白井南章、千歳園藤彦、渡辺黄鵠の5名の絵師によって模写された厳島神社の奉納絵馬67面の縮図を収録する。本図は狩野常信が四代・綱長の命をうけ制作した奉納絵馬のうちの一つ。

近世初期の安芸地方の絵画は雲谷派と呼ばれる一派が主流でした。雲谷派の祖は毛利氏の御用絵師であった雲谷等顔で、雪舟画の継承者として多くの作品を残しています。毛利氏が山口へ転封となると、等顔も萩に移りますが、その子の等屋は広島に残り、福島氏に仕えました。

浅野氏に仕えた雲谷派の絵師は、三谷等哲とその子の等悦などがいましたが、次第に幕府の御用絵師である狩野派が、雲谷派に代わり安芸地方でも主流となっていきます。

広島藩では、二代・光晟の時代に竣工した広島東照宮に、狩野安信が光晟の命により「三十六歌仙扁額」を奉納した記録があるのをはじめ、藩内の寺社が所有する絵画の写しを作成しています。また、浅野氏から厳島神社に奉納された絵馬にも、多くの狩野派の絵師が起用されました。五代・吉長の時代、享保6年(1721年)には「狩野壱(円山)」という狩野派絵師を藩に招き抱えたという記録が残っています。以降、広島藩では勝田友溪といった狩野派絵師を招き抱えていました。

藩主や藩士も余技として絵師に学び、多くの作品を残しています。特に四代・綱長は丹青の技に長じたとされ、自筆の画についての記録も残っています。また、好学な藩主として知られた七代・重晟も藩に仕えた絵師に学び作品を残しました。

浅野重晟筆「酈縣菊士童之図」
〔公益財団法人上田流和風堂所蔵〕
〔『芸藩ゆかりの絵画展』より転載〕



江 戸時代中期以降となると、藩士や庄屋・豪農などの富裕層の間で、床の間や襖を絵画で飾ることが流行し、絵師の需要が高まります。

また、次第に町民なども余技として絵画を楽しむようになり、有名な絵師を江戸や京都から招いて学び、または自ら学びに行くなどしていました。流派も狩野派だけでなく、大和絵で代表される土佐派、狩野派から出て一派を成した円山派・四条派などに学ぶ者もいました。

広島藩の土佐派の画人では、藩士の河原南汀かわはらなんていがおり、四条派の中川墨湖なかがわぼくこと『芸藩通志』の挿画を描いています。その他、四条派の画人として、文政11年(1828年)に厳島神社に「鯉魚図」の扁額を奉納した町絵師の山田雪塘やまだせつどうや下級藩士出身の山県二承やまがたにしゅうなどがいます。

広島の藤井葆光堂ほうこうどうは、自家に円山派の長澤蘆雪ながさわろせつや八田古秀はったこしゅうを滞在させ絵を学んでいました。長澤蘆雪は、広島滞在小島八景やまのば(九州国立博物館所蔵)や「山姥図」(厳島神社所蔵)など優れた作品を描いたことで知られています。

享保16年(1731年)に中国の沈南蘋しんなんぴんが長崎に渡来し、その写実的な作風を継承した南蘋派と呼ばれる一派が生まれ、当時の絵画に大きな影響を与えました。江戸時代中期の広島藩を代表する画人である岡岷山おかみんざんもその南蘋派に学んだ一人と言われています。岡岷山は下級武士の出身でしたが、幼いころから画道を志し、はじめは藩の御用絵師で狩野派の勝田友溪かつたゆうけいに学び、その後、当時南蘋派の名手であった宋紫石そうしせきに江戸で画法を学んだとされています。

岡岷山は七代藩主・浅野重晟に重用され、重晟に絵の手ほどきをするとともに、厳島の奉納絵馬をはじめ、公務で藩内各所をめぐる調査・写生を行い、実際の景観を写し取った「厳島図巻」(神戸市立博物館所蔵)や「三原登覧図」(三原市・妙正寺所蔵)などの絵図を制作しています。また、藩から褒賞された領内の孝子奇特者の略伝をまとめた『芸備孝義伝』(初編)など書物の挿画も担当しました。



岡岷山筆「松に孔雀図」〔個人蔵〕
(『芸藩ゆかりの絵画展』より転載)

庭園文化

広 島城の東に位置する名勝・縮景園は、浅野氏別邸の庭園で、浅野長晟が家老・上田宗箇そうこに作庭を命じ、浅野氏の広島城入城の翌年に造園が始められました。上田宗箇は古田織部ふるたおりべから武家茶道を受け継いだ一流茶人として知られ、広島の上田宗箇流茶道の祖としても有名です。

作庭当初、縮景園は「泉水館」または「泉水屋敷」と呼ばれていました。「縮景園」という名称は、五代藩主・吉長に仕えた堀南湖の『縮景園記』に初めて記され、さまざまな趣をもつ景勝がいくつも縮め寄せられている園の姿に由来するとされています。18世紀の絵図から、庭全体に芝と砂利をめぐらせ、中央の池に瀛仙嶋えいせんとう、千秋嶋せんしゅうとうの2つの島が浮かぶ作庭当初の庭園の様子をうかがい知ることができます。

また、藩医であった黒川道祐が編纂した『芸備国郡志』では、楼上・築山から周辺の山々や、遠く厳島を望む風景、北西の三滝山に植えられた宗箇松と呼ばれる巨松を眺めることができる茶寮からの景色が称賛されています。

宝暦8年(1758年)、広島城下は大火に襲われ、縮景園も多くの建物や樹木を焼失しました。その後、藩主となった七代・重晟は、縮景園の建物の復旧と園域の拡張を行い、さらに尾道出身の京都商人で庭師の清水七郎右衛門を起用して、縮景園の大改修を行いました。この大改修により跨虹橋が架設されるなど、ほぼ現在みられる縮景園の姿が完成しました。

重晟は隠居後に、頼春水や梅園太嶺に命じ、34か所の「縮景園名勝」と「縮景園八勝」を選定させています。縮景園八勝については、岡岷山が描いたとされる「縮景園八勝図」が今日に伝わっています。

また、同じく浅野氏の別邸与楽園が水主町にありました。与楽園は七代藩主・重晟が隠居後の享和元年(1801年)に築庭を始め、文政8年(1825年)から建物・庭園に大幅な改修を加えたもので、水主町屋敷とも呼ばれていました。



「安芸国広島縮景園全景」〔国立国会図書館デジタルコレクション〕

重晟の大改修後の縮景園の様子をよく伝える。中央に架かる橋が現在もみることができる跨虹橋。跨虹橋の名称は、中国浙江省にある西湖の蘇堤六橋のひとつに由来する。

観古館と浅野氏の宝物



観古館第一号館階上
(榎田直太郎「観古館」より)
〔国立国会図書館デジタルコレクション〕

大正2年(1913年)に、広島藩最後の藩主・浅野長勲が、浅野家の宝物を一般公開することを目的として、私立美術館「観古館」を現在の県立美術館の位置に設立します。浅野長勲は本リーフレット第5巻でも紹介したように、浅野学校・浅野図書館を設立しており、観古館もこうした文化事業の一環として設立されました。

観古館の敷地面積は1,424坪で、中央の事務所を挟んで左右に2階建ての1号館・2号館と呼ばれる建物がありました。1号館・

2号館の各階には、それぞれ50坪の展示室があり、ガラスに覆われた陳列棚・陳列台に浅野家が所蔵する刀剣・器物・書画が展示されていました。その展示品のなかには、現在各所に散逸している伝・趙昌筆「林檎花図」(畠山記念美術館所蔵)、因陀羅筆「寒山拾得図」(東京国立博物館所蔵)といった中国絵画(いずれも現在は国宝指定)や、雪舟の作品をはじめとした日本中世の水墨画の絵画コレクションがありました。江戸時代の将軍家や大名家は、教養や権威を示すために古美術品を多く収集していましたが、浅野氏のコレクションは上記の国宝・重要文化財クラスの作品を多数所蔵しており、他の大名のものと比較しても特に良質なコレクションであったことが知られています。

広島藩の特産工芸品



「銅蟲九輪風炉」
〔公益財団法人上田流和風堂所蔵〕
〔『図説広島市史』より転載〕

広島特有の工芸品に銅蟲があります。銅蟲は銅をたたき出し整形したものに槌目をつけ、藁の煙で燻して着色を行う銅細工で、浅野氏とともに紀伊国から広島へ入国した銅蟲清氏という職人により始められたとされています。「銅蟲」の名は、清氏が常に銅細工の仕事に励む姿から「銅の虫」と呼ばれたことに由来するとされていますが、正確な由来はわかりません。銅蟲は広島の特産品としてたびたび他藩主から所望され、進物用に供されていました。江戸時代後期に成立した喜田川守貞の風俗誌『守貞謾稿』では「広島薬罐」と記されており、全国的に知られていたことがうかがえます。

広島藩の陶芸には宮島焼(御砂焼)などがありますが、城下では江波焼がありました。江波焼は、文政11年(1828年)には、沼田郡江波村で油屋忠右衛門を窯元として製作がはじめられていました。この江波焼は藩営事業であり、他国産の日用雑器の移入を抑えて国産自給に切り替える意図があったため、広島城下の人々の需要に応じて量産が行われていたようです。

漆芸では、金城一国斎による高盛絵があります。天保年間(1830年～1843年)に広島に来住した名古屋の二代金城一国斎(中村一作)は、沼田郡江波村にいた木下兼太郎の非凡な才能を認め、弟子として技術を教え、金城一国斎の名称を授け後継者となりました。その後、木下兼太郎は各地に伝わる漆芸の手法を伝習し、二代目が創案した中国伝来の堆黒や高蒔絵よりも一層高く文様を盛り上げる「高盛絵」と呼ばれる独特の一国斎塗を完成させました。

芸能と娯楽

広島での能の上演は、厳島神社の社前で永禄11年(1568年)、観世大夫宗節が能を奉納し、この時に能舞台が建設されていることから、戦国期以降しばしば上演が行われていたことが知られています。

浅野氏の時代は、武家の式楽として能・謡曲が保護され、盛んに演じられた記録が残っています。二代・光晟の時代に御役者として、喜多流・脇方高安流を江戸・広島においてそれぞれ抱え、囃子方も御

役者とし、狂言方は庶民の芸能に優れたものを選んで取り立て、それぞれ着物や銀子^{ぎんす}などを授けています。三代・綱晟の時代には、広島城下中通組中町に役者多門が建てられ、能役者の住居に充てられました。その後この一角には能役者が住み、舞台を設けて稽古が行われています。四代・綱長は特に能を好み、延宝8年(1680年)に厳島神社に能舞台を寄進しています。



『新修広島市史』第4巻より
饒津神社で行われた神能の様子。近代では、藩政時代に城内で能が行われていたのを継承して、浅野氏ゆかりの饒津神社で能が催された。

江戸時代中期以降になると、武家の式楽としての能が次第に町民にも広がっていくようになり、藩は町民の間からその技が堪能なものを能役者として召し出して扶持^{ふち}を与え、保護しています。

広島城には元禄14年(1701年)に三の丸能舞台、天明元年(1781年)には中奥能舞台が作られています。饒津神社には浅野長勲により浅野氏の歴代の能道具が奉納され、同家の別邸「泉邸」(現縮景園)で保管されていました。この能道具は原爆による焼失を免れたものが一部現存しており、平成30年(2018年)に、広島市重要文化財に指定されました。

広島藩では、城下での芝居興行や芝居遊所に行くことを禁止していたため、人形浄瑠璃や歌舞伎などは城下町では興行されていませんでしたが、近郊の草津・江波・可部・海田市などの地域では、特別な神仏の御開帳や市立てにあわせて芝居が行われていました。宮島では、四季の市(特に夏の市)に芝居小屋が立って、上方から歌舞伎役者や浄瑠璃役者が招かれ、多くの芝居が上演されていました。城下の人々は厳島神社に参拝した後に、このような芸能を見物し楽しんでいました。

祭礼と娯楽

広島城下の主な祭礼は、旧暦2月の初午に行われた城内三の丸稲荷社祭礼、旧暦9月17日の尾長東照宮祭礼、旧暦6月17日の厳島管絃祭、旧暦10月20日の胡子祭りなどがあげられます。江戸時代の人々にとって、これらの祭礼や縁日などの行事は娯楽でもありました。

城内三の丸稲荷社の祭礼は、領民の参詣も許可されていたため郡・町から数万人が参詣し、賑わいました。尾長東照宮の「通り御祭礼」は、徳川家康の33回忌にあたる慶安3年(1650年)に行われて以後、家康の薨去50年ごとに行われ、神輿が東照宮から広瀬明神まで渡御する行列には、正徳5年(1715年)から町民も加わるようになりました。

管絃祭は毛利氏の時代に発展し、18世紀中頃以降からは管絃祭に参加するために広島城下の町々から美しい装飾がされた御供船^{おともんぶね}が出るようになりました。管絃祭の前日16日の夕刻の御供船の出発と、18日朝の帰着の際には、これらを見て楽しむために、多くの見物人が川の両岸や橋に集まり賑わいました。



「六月十六日夜広島本川口の図」
(『芸州厳島図会』巻之五より)
[国立国会図書館デジタルコレクション]



浅野文庫蔵「広島本川川ざらえ町中砂持加勢図」(1枚目)〔広島市立中央図書館(浅野文庫)所蔵〕

本 図は幕末に行われた「^{すなもち か せい}砂持加勢」の様子を伝える当時の瓦版の一部です。本リーフレット第4巻で紹介したように、城下では舟運の機能を維持するために、川底に堆積する土砂を取り除く川掘り(川^{かわ}浚え)が何度か行われていました。文久2年(1862年)、広島城下の町衆が川掘りの土砂運搬の手伝いを「砂持加勢」と称し、「祭り」に仕立てあげました。「砂持」という土砂運搬は上方で祝祭行事として実施されており、文久2年のこの「砂持加勢」はその影響を受けたものだと思います。5月7・8・9・11・12・13日の各日に約10町ずつ、城下の延べ57町がそれぞれの町名にちなんだ装飾を施した山車(屋台)を製作して、お囃子を乗せて曳き、仮装をして行列をつくり、踊りながら城下を練り歩きました。これは現在のフラワーフェスティバルのパレードに通じるものであったと言えるでしょう。

おわりに

本リーフレットでは、全6巻にわたり、浅野氏の藩政や広島城下の暮らし・文化について紹介しました。約250年12代にわたる広島藩浅野氏の歴史は長く、紹介できなかったものも多くありますが、リーフレットをきっかけに、広島町の基礎を作った浅野氏を知り、地域の新たな魅力の発見となれば幸いです。

令和2年(2020年)
5月発行

編集：広島市市民局文化スポーツ部文化振興課 TEL082-504-2851
監修：中山富広 広島大学大学院文学研究科教授
協力：公益財団法人広島市文化財団広島城
西村晃 広島県立文書館研究員(エルダー)

主要参考文献：『広島県史』近世1、『広島県史』近世2、『図説広島市史』
横田直太郎『観古館』